



Title	異言語間に共通する概念研究：日本語の助詞、韓国語の助詞、英語の前置詞を対象に
Author(s)	李, 潤玉
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/58765">https://hdl.handle.net/11094/58765</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	李潤玉
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(言語文化学)
学位記番号	甲第29号
学位授与年月日	平成15年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	異言語間に共通する概念研究 —日本語の助詞, 韓国語の助詞, 英語の前置詞を対象に—
論文審査委員	主査 教授 杉本孝司 副査 教授 仁田義雄 副査 助教授 岸田文隆 副査 教授 苧阪満里子 副査 助教授 上田功

## 論文の内容要旨

### Chapter1. 空間表示の格助詞「で/로[ro]・에서[eseo]」の概念分析(その1)

一般に「動作の行われる所・時・場合を示す」／「手段・方法・道具・材料を示す」／「理由・原因を示す」／「事を起こした所を示す」／「身分・資格を表す」／「事情・状態を表す」／「期限・範囲を表す」／「配分の基準を示す」(以上『広辞苑』)といった多岐の用法に分類される日本語格助詞「で」について田中 & 松本(1997)、山梨(1997)、中右 & 西村(1998)では各々、「場所を限定し、その場所内で(にて)何かが起こる。その「場所」を限定する事象が「モノを限定し、それで(もって)何かが起こる」という事象に拡張された結果、「手段」等の意が発生する」／「話題となる名詞とそれをマークする格助詞の関係について、メトニミー的な意味関係に基づいた、補完的に拡張する認知プロセスを考慮して初めて、格役割の適切な解釈が得られる」／「「個体の位置」を示す「に」が基本述語動詞に内在的な項を表示するのに対し、「状況の位置」を示す「で」は随意的な付加語を表示する」と説明されている。本章では、これらの先行研究を踏まえながら、格助詞「で」の根源的な中核概念を解明し、その概念が共起する指示物との関係に基づき、どのような概念拡張のプロセスを通して様々な意を表層的に発生させているのかという、我々の無意識的意識に存在する認知メカニズムの一端を明らかにすることを試みる。具体的には、「で」が名詞句・動詞句と共起して表す「場所」(例:花子は大阪で/\*に生活している)と「時間」(例:この講演は明日で/\*に最終日となっています)の概念に注目し、更には特殊な動詞に前置される「に」(例:鎌倉に遊ぶ)の概念を検証することによって、「で」が包含する空間表示のメカニズムを観察する。そして、最終的には[「で」+動詞句]に焦点を当て、「公園に/\*で行って、そこ\*に/\*で休憩をする」が「(主体が到達した存在位置である)公園における空間の利用という形態/形式で休憩する」として捉えられるように、

「に」が単なる主体の「到達点(及び到達後の位置)」概念表示語であるのに対し、「で」を「(主体が到達した存在位置(すなわち近接した位置)における)空間利用形式/形態」概念を包含すると規定する。つまり、日本語助詞「で」は物理的「場所」を中核概念とし、「利用(形式/形態)」及び「近接」概念を媒介とすることによって、「野球は九人で一チームだ。」に代表される「で」の多岐に渡る用法が「野球は九人形式/形態をとって一チームだ。」で示されるような「形式/形態」の意に収束するという概念的な見解を提示する。

## Chapter2. 日本語格助詞「で」と韓国語格助詞「로[ro]・에서[eseo]」の概念分析(その2)

「太郎はペンで生計を立てている。」/「太郎は東京へ向かった。」で示されるような「物体・方向」に関する事象について、日本語ではそれぞれ格助詞「で」/「へ」が用いられるのに対し、韓国語では各々「타로는 펜으로 생계를 잇고있다 [taro-neun pen-euro saenggye-reul ikkoitta]」/「타로는 동경으로 향했다[taro-neun donggyong-euro hyanghaetta]」と同じ助詞「로[ro]」が用いられる。通常、プロトタイプ的な「手段・道具」名詞に後続する「로[ro]」は、「同一空間領域の利用形式・形態」概念を包含する日本語格助詞「で」と密接な概念的つながりがあり、共起する名詞の指示物が[+場所]の意味合いを帯びるときには「에서[eseo]」(例:도서관에서 공부한다[doseogwan-eseo gongbuhanda] (図書館で勉強する))が、また、[-場所]を示す場合には「로[ro]」(例:칼로 과일을 깎는다[kal-ro gwail-eul kkaneunda] (ナイフで果物を剥く))がその姿を現す。しかしながら、たとえ「で」が「同一空間領域の利用形式・形態」として、また、「へ」が従来「方向・目標地点」(『広辞苑』)の意を示すとして区分されることがあっても、上例のような「物体・方向」に関する事象に関しては、韓国語では同じ「로[ro]」という助詞が用いられることから、これら 2つのカテゴリーが部分的に重なり合うような何らかの概念的な結びつきが導き出されるのではないかと想定される。そこで、本章ではまず、空間表示の日本語格助詞「で」と韓国語格助詞「로[ro]」が包含する「手段」概念に焦点を当て、「認知言語学的立場から見た場所理論」の観点から「手段・道具」概念を検証する。そして、導き出された概念メカニズムに基づいて、「で」の概念変化のプロセスを解明し、その後、「手段・道具」概念が如何に「方向」概念と密接な関係を築いているのかを考察することによって、異言語間における異なる概念的並行性を明らかにすることを試みる。

## Chapter3. 'At'、「に」、「에[e]・에게[ege]」に見る名詞指示物のプラグマティックス

本章では、「同一空間領域の利用形式・形態/限定」概念表示助詞である「で」・「에서[eseo]」/「로[ro]」に対して、「無指定の場所」概念を表示する「に」・「에[e]」/「에게[ege]」のより詳細な概念的考察を行うことを研究目標として、まず、英語の'at'には如何なる人間の認識が反映されているのかを論述する。つまり、人間が具象的物体/具象的场所を観

察可能な物理的「一点」標識(例: Put a point on the map, and look at the point.)に昇華する活動は実際に網膜に写っている現実の物理的場所表示、すなわち或る程度の距離から見た視覚上の「一点」認識に転用されており(例: Look at the building.)、更には抽象的意味合いを帯びた「一点」概念が大腦の中における「一点」概念を表示することにつながると想定する(例: Taro is at the front door.)。逆に言えば、このような‘at’に彩られた外界の具体物(Gestalt)を認識する際の概念化のプロセスに注目することは大腦活動の一端を解明し、無意識的意識における「一点」の認識と外界世界との概念的結びつきを明らかにすると考えられるが、物理的場所／空間が現実世界において如何に利用され得るのかという「空間利用・空間形態」に関する認識が加味される時、大腦の中に存在する漠然とした一点は他の2次元や3次元前置詞としてその姿を表すことから、‘at’の「0」次元とはやはり、物理的なあらゆる特性を包含せず、視界に何も存在しない事象を示すことに遡及する。このような具現化のプロセスは日本語格助詞「に」韓国語格助詞「에[e]・에게[ege]」と他の助詞(例えば「で・에서[eseo]／로[ro]」)との概念的関係にも見出され、前者が「単なる存在位置」／「無指定の場所」概念を基盤に全ての物を「抽象的な一点」に昇華する力を備えているのに対し、「空間利用」概念を包含する後者は大腦における一点を具現化し、それを全面利用することを目的とした位置／場所に変換する力を持つことを論じる。

#### Chapter4. 「を」・「に」、「를[reul]」・「에[e]・에게[ege]」の概念分析

「山を登る」・「산을 오르다[san-eul oruda]」／「山に登る」・「산에 오르다[san-e oruda]」として示されるような移動動詞と共に起した時の各々の格助詞について、母国語話者においてもその相違を明確に述べることは難しい。本章ではまず、格助詞「を／를[reul]」と「に／에[e]・에게[ege]」の交替現象に焦点を絞り、そこに潜む我々の「外界の見方」の観察を行う。つまり、「を／를[reul]」と交替可能な「に／에[e]」を用いた文が容認される場合、「を」が「[対象名詞の指示物そのもの]を動詞の意味的相に基づいて移動する」を表示するのに対し、「に」は「[NOT-対象名詞の指示物]を動詞の意味的相に基づいて移動し、対象名詞が指示する場所の或る一点に到達する」と規定可能であり、更には前者が「移動の全行程の表示力」という概念を包含しているからこそ、動詞が示す行為の影響を直接受ける対象物を対格目的語として表示できることを論じる。その後、この「移動の全行程の表示力」という概念を基盤に、「택시를 타다[taegsi-reul tada](タクシーを乗る)」で示されるような、一般に日本語格助詞と異なった使い方をされると言われる韓国語格助詞「를[reul]」の一見特異な用法を詳察することによって、日本語／韓国語の更なる概念的並行性を解明することを試みるが、その目的はあくまでも「を／를[reul]」と「に／에[e]」とが分布を同じくする正文の違いを説明するためである。例えば、「学校\*を行く／学校に行く」／「학교를 가다[haggyo-reul gada]／학교에 가다[haggyo-e gada]」では、「를[reul]」は前置する名詞指示物の本来の機能(授業を受ける／수업을 받다

[sueob-eul batta])を、「에[e]」は単に移動の到達点を意味する(教会、レストラン、映画館等も同様)。

### Chapter5. 「で」と「로[ro]・에서[eseo]」の概念分析 (その3)

本章では、これまで論述してきた「に／에[e]・에게[ege]」、「へ／로[ro]」、「で／로[ro]・에서[eseo]」が包含する概念を体系的に考察するために、まず、「太郎は東京に行った」・「타로는 동경에 갔다[taro-neun donggyong-e gatta]」／「太郎は東京へ行った」・「타로는 동경으로 갔다[taro-neun donggyong-euro gatta]」各々で示されるような「に／에[e]・에게[ege]」と「へ／로[ro]」との間に存在する概念的相違を再認識し、「アメリカに／へ移住する」といった複合動詞の焦点化に伴う助詞選択のメカニズムを検証する。次に、上出した各日本語格助詞が後続することができる「ところ」に焦点を当て、「ところ」そのものが表示する物理的「場所／空間」概念に基づいた中核的な役割について論じた後、「目をつぶってバットを振ったところ、??思った通りのことが起こった／思っても見なかったことが起こった(つまり、バットにボールが当たった。)」というような節導入における「ところ」が「[予想／期待](前提) → 事象(左節) → 予想／期待に反する結果(帰結節)」というスキーマを構築していることを考察する。そして、導き出された概念体系に基づいて「ところへ」／「ところに」の概念的差異を明確にする。つまり、「[花子が下宿に遊びに来ると予想して]太郎が掃除をしているところへ／ところに／??していたところ、花子がやって来た。」で示されるように、「ところへ」／「ところに」は左節の事象が発生する場所／空間において帰結節の[±意外]の事象が起きるスキーマを持つ。しかしながら、「ところへ」と「ところに」もまた、両者異なった様相を呈しており、前者の「ところへ」が「へ」の「方向」概念を基盤に、「ところ」によって示される或る「状況／場面」を目がけて帰結節における主体／対象物が移動するような事象が表示されるのに対し、後者の「ところに」は「に」が「存在／位置」概念表示助詞であることから、「ところ」によって示される或る「状況／場面」に帰結節における主体／対象物が存在／位置するようになる事象を表示すると考えられる。それらと比較して、「私が入院するように忠告したところで、彼は決心を変えないよ／\*彼は快く受け入れてくれるよ。」で示されるような「ところで」に関しては、「で」そのものが「空間利用」概念を基盤に「A[+存在事象] + 「で」 + B[-存在事象]」というスキーマを構築する標識となる(例: 太郎は屋根(の上)に居て(=に在って)、(そこで)逆立ちをしている／飛び跳ねている\*(そこで)居る／\*位置している。)ことから、「ところ」によって示される或る「状況／場面」が帰結節における主体／対象物によって「制限利用」される事象を表示することを論じる。つまり、このような「ところに」／「ところで」のスキーマの相違は偏に、「ところ」と共起する「に」／「で」各々のこれまで詳述してきた概念的相違に起因する。

上述した「に」から「で」への具現化のスキーマは韓国語の「에[e]」と에서[eseo]」の

関係にも当てはまることと同時に、この論文で扱った韓国語格助詞の体系的仮説を Appendix において提示する。

## 論文審査の結果の要旨

本博士論文の主たる部分は1～5章と Appendix から成る。韓国語助詞体系の今後の研究プログラムの素描とも言える Appendix を除けば、全体は大きく、1, 2, 5章と3, 4章の2部から構成されている。(以下、それぞれを第一部、第二部と呼び分ける。)李潤玉氏(以下「著者」)が本論文で目指した主たることは、日本語/韓国語の格助詞「で/로[ro]・에서[eseo]」の用法・分布を詳細に比較検討することにより、(1)その背後に潜む「空間」を基盤とした概念拡張の認知メカニズムがどのように関与しているのかを明らかにすること、(2)何故そうと言えるのかを論証すること、(3)そこに見られる格助詞選択に関わる言語固有の特殊性を許す普遍性を明らかにすること、(4)これら格助詞の用法に関して詳細且つ首尾一貫した記述を与えること、である。第一部がこれらの分析や議論に充てられ、第二部はそのための関連格助詞に関わる分析となっている。

著者が依拠する理論的枠組みは、概念の修得・形成における身体的基盤の重要性を説く認知意味論であり、特にメタファ理論がその論証に深く関わっている。格助詞「で」に関して幾つの意味・用法が確認できるのかという問題自体は学者や立場により様々であるが、著者は理論とはまったく独立した形で提供されている『広辞苑』のそれを取りあげ議論の出発点としている。先ず冒頭、認知意味論の基本的前提などに関して審査委員が質問や疑問を出すことにより、理論に関わる著者の理解を確認した。第一部で著者が用いる「で/로[ro]・에서[eseo]」の多義性の説明方法は、「中核概念の抽出+拡張原理の適用」であり、認知言語学における格助詞の先行研究が取るアプローチ(単なるメタファやメトニミによる拡張)と一線を画している。著者はこの中核概念として「(主体が到達した存在位置(すなわち近接した位置)における)空間利用形式/形態」概念を、そしてその拡張原理にメタファその他の関連理論を用いている。単純な「中核概念の抽出+意味拡張」のアプローチは Abstraction Approach と呼ばれその枠組みの妥当性は非常に疑わしいことが理論的にも取りあげられていることもあり、著者のこの分析方法に関しては審査委員からの質問も集中した。この質問に対する応答は必ずしも満足のいくものではなかったと言えるが(1)著者が最終的に提示した「で/로[ro]・에서[eseo]」の多義性の説明は非常に説得性があること、(2)著者がプロトタイプ理論を強く意識したカテゴリ論を背景に持つことが論文内で明示的に述べられていることから、多義性の分析の一つの新しいあり方が主張されている、と理解できた。(実際、審査ではその指摘は明示的にはなかったが、著者の分析は放射範疇との親近性を感じさせる。)

次に著者のユニークな説明方法として、この「で/로[ro]・에서[eseo]」の中核概念が、ある意味ではプリミティブではあるが、別の意味では他の助詞、特に「を・に/를[reul]・에[e]・에게[ege]」などが表す場所概念と深く関連していることを検証している所にある。いわゆるゲシュタルト知覚の原理を格助詞の分析に持ち込んだものと理解でき、その格助

詞概念に関する議論のユニークさと緻密な「空間」認識に関わる考察や論考は、言語学、哲学、心理学にまたがって説得性があり、審査委員から高く評価された。また第5章における「ところ、ところに／へ／で」に関する議論は第一部、第二部の議論を確たるものに行っていることが確認できた。但し「ところ」その他に関しては著者が取りあげたもの以外の用法も考慮すべきであることが委員から指摘された。

以上、認知意味論の試みとして見た場合、先行研究の欠点を克服する興味ある格助詞の分析や議論を提示している論文であると理解できるが、審査委員が出した日本語学や朝鮮語学の立場からの質問には必ずしも満足のいく説明や応答ができなかった部分もあり、今後の研究課題が指摘された形になった。さらに、脳研究の立場から審査委員が出した質問にはその回答に窮するという場面もあった。また音韻論の立場から、明らかな誤分析も指摘された。

しかし上記の理論的分析の過程で提供されている鋭い観察や分析はその質・量ともに審査委員を圧倒させるに十分のものであり、すでにこの分野で著書（共著）や論文も数多くある著者の今後の研究が大いに期待されると同時に、本論文が博士号に十分値する「労作」であるという審査委員全員の一致した結論を得た。